漢文の教材研究

―唐詩(一)―

森野繁夫

授業で唐詩を扱う際に、ここだけはおさえておかねば、と思われる個所が、それぞれの作品にいくつかずつある。その全てを指摘し説明することはできないにしろ、いくらかでもまとめておけば、自分が次にその詩を扱う時に、更に深い読みとりができるであろうし、もしかしたら他の人人の参考になるかもしれない。このようなことを考えて、唐詩についての気付きを記しておくことにした。

(一)「送友人」　李白

青山横北郭　白水遶東城
此地一為別　孤蓬万里征
浮雲遊子意　落日故人情
揮手自茲去　蕭蕭班馬鳴

青山　北郭に横たわり
白水　東城を遶る
此の地　一たび別れを為し
孤蓬　万里に征く
浮雲　遊子の意
落日　故人の情
手を揮りて茲より去れば
蕭々として班馬鳴く

この詩は、何時、どこで、誰のために作られたものか、よくわからない。しかし此の作は、「友人」のところに、李白の友人の誰を当てはめても、不自然なところはない。例えば「友人」が杜甫であっても、それなりに意味は通じる。杜甫は三十四歳のころ、十一歳年上の李白に随って、しばらく山東地方に遊んでいる。二人は何か月か同じ場所に住み、あちこちの山や池台をめぐり歩き、やがて杜甫が仕途を求めるために西方長安へ帰る時、李白は魯郡の石門でそれを見送っているが、その時も、おそらく「送友人」の詩に詠われたような情景ではなかったかと想像される。

○青山横北郭、白水遶東城。

この対句の対応している語句を見るに、「青」と「白」は、作者の気持ちを象徴するような寂しい色彩であり、「横」―「遶」は、静かにたたなわる山なみと、白く波立ち、キラキラ光りながら流れている川。「北郭」―「東城」は、北から東へと場面の広がりを示している。以上、町はずれの小高い丘の上からの眺めらしい。

李白が、はるか下の方に見える町の様子をこのように描写するのは、二人で過したこの町での何か月かをふりかえり、なつかしんでいるからであろう。また、この美しい町をあとにして独り旅に出る、その友の旅が前途に希望のあふれるものであれば、李白はこのように寂しくもなつかしそうに、この町の様子を描写しはしなかったであろう。友の前には、つらく悲しい旅が予想され、李白は友の前途

の多難と孤独に同情しながら、楽しかった此の町での、友と過ごしたあの時、この時をふりかえっているようである。

○此地一為別、孤蓬征万里。

第一・二句で描いた、二人にとってのなつかしい町を「此地」と指して、友はこの町を去って万里の旅に出てゆくことを述べ、その旅が「孤蓬」のごときものであろうと心を傷める。「孤蓬」は、秋になって枯れると、北風に根を吹きちぎられて、ひとり転がってゆくもので「転蓬」という語もある。「孤蓬征万里」の句には、友の孤独な旅に同情し、その無事を祈る、李白の思いが込められているようである。

○浮雲遊子意、落日故人情。

「浮雲」は、風の吹くままに大空を流されてゆく雲であるが、それは運命のままにさすらう旅人となる友の、心細さをたとえたものであろう。「浮雲」といえば、すぐに「論語」述而篇の「不義而富且貴、於我如浮雲。」が思いおこされるが、あてにならない、たよりないもののたとえ、という点では、両者共通している。

「落日」は、深く落ちこみ沈んでゆくものであり、その寂しい色あいとともに、友を送る李白の、どこまでも寂しく沈んでゆく気持ちをたとえている。

○揮手自茲去、蕭蕭班馬鳴。

「揮手」とは、李白としっかり握りあっていた手をふりほどいて、という意味とも考えられるが、十例ばかりある李白の「揮手」の用例からみて、次第に遠ざかってゆきながら別れの手をふる意である。友はおそらく「さらば」のほかには何も言わずに、いや、言えずに、馬に乗り、別れの手をふりながら遠ざかっていったものであろう。その友の思いを、かわりに伝えるかのように、次第に遠ざかってゆく馬が長くいなないている、まさに映画のラストシーンのごとき情景である。

（構　成）

青山横北郭
白水遶東城　これまで二人が過したなつかしい町の様子。

此地一為別
孤蓬征万里　友は此の地に別れを告げて孤独な旅に出ることをのべる。

浮雲遊子意
落日故人情　別れにあたっての友人の意（作者が推測）と自分の情。

揮手自茲去
蕭蕭班馬鳴　いよいよ別れ。去りゆく友の、そうして李白の思い。

(二)「春望」　杜甫

国破山河在　国破れて山河在り
城春草木深　城春にして草木深し
感時花濺涙　時に感じて花にも涙を濺ぎ
恨別鳥驚心　別れを恨みては鳥にも心を驚かす
烽火連三月　烽火　三月に連なり
家書抵万金　家書　万金に抵る
白頭搔更短　白頭　搔けば更に短く
渾欲不勝簪　渾べて簪に勝えざらんとす

杜甫四十六歳の作。前年すなわち粛宗の至徳元年（七五六）八月、

霊武にいる粛宗のもとへおもむかんとする途中、賊軍に捕えられた杜甫は、長安に連れもどされてしまった。おそらく官位が低かったためであろう、王維のように禄山の政府に仕えることを迫られることもなく、長安城外へ出ることはもちろん禁止、城内においても勝手に出歩いてはならぬ、くらいの処置ですんだらしい。しかし杜甫は、この「春望」の詩を詠んで間もなく四月には、霊武から南下して鳳翔に行在を遷していた粛宗のもとへ、果敢にも脱出をこころみ、成功する。

○国破山河在、城春草木深。

杜甫の対句技法については、その細密な心くばりに定評があるが、この対句にもそれがうかがえる。すなわち、「国破山河在」の句では、「国破」が人事、「山河在」が自然についての描写で、一定の法則にそって規則正しい循環をつづける悠久不変の自然に対して、混乱ばかりつづく人間の世界の様子を、一句の上下で対比している。それに対する第二句「城春草木深」では、「長安の町には春がやってきて、草や木が盛んに茂っている」と、一見、自然の様子だけが詠われているようであるが、その裏には、いつもの年であれば、このあたりには都の春を楽しむ人人がたくさん出ていて混雑しているのだが、という思いがこめられている。つまり此の句は、表面に自然を、裏面に人間の世界のことを述べているわけである。

「国破山河在」に対して「城春草木深」と、対応する語句の意味、文法上のはたらきの、それぞれ整っている対句であるうえに、内容的にも、自然と人事とを、第一句では上下の関係で、第二句では表裏の関係で対比させている。

○感時花濺涙、恨別鳥驚心。

「涙を濺ぐ」のは「花」、「心を驚かす」のは「鳥」として擬人的に解するのは吉川博士であるが、その詳細については「杜甫詩注」第三冊参照。

○烽火連三月、家書抵万金。

「烽火連三月」は、第三句「感時花濺涙」の「戦乱のつづく時世を嘆いては、美しい花を見てさえも涙が流れる」という状態を、具体的に「烽火は三月になってもまだ続いている」と更めて詠い、また第四句「恨別鳥驚心」の「親しい者たちとの別離を恨んでは、楽しかるべき鳥のさえずりを耳にしてさえ心がびくつく」という状態を、具体的に「家書は万金にも相当する」と詠った。

○白頭搔更短、渾欲不勝簪。

杜甫はなぜ白頭を搔きむしるのだろう。その原因は、うちつづく戦乱、家族と離ればなれになっていること。そのような不自然な状態に対する悲しみと怒り。さらに、長安の賊中にあって、そのような状態に対して何もできないでいるいらだたしさ、などのためであろう。

彼は人間の世界のあるべき姿として、家族や親しい者どうしは、いつも一緒にくらすはずのものと考えていた。杜甫のそのような考え方は、さらに人間以外の物にまで及んでいる。後に夔州に滞在していた五十六歳のころに作られた「秋野」の詩に、次のような句がある。

易識浮生理　　識り易し　浮生の理
難教一物違　　一物をして違わしめ難し

水深魚極楽　水深くして魚は楽しみを極め
林茂鳥知帰　林茂りて鳥は帰るを知る

つまり、生き物すべて、それぞれに所を得て、その生を全うすることが、この世界の道理であるという。しかし世の中は、彼の考えていることと真反対の状態となっており、杜甫の嘆きは深かった。

杜甫には、

致君堯舜上　君を堯・舜の上に致し
再使風俗淳　再び風俗をして淳からしめん

（奉贈韋左丞丈二十二韻）

という大きな願いがあり、わが身を「竊比稷与契」（竊かに稷と契とに比す）—自京赴奉先県詠懐—太古の聖王である堯・舜の朝廷の賢相であった稷や契になぞらえていた。さらにまた、先祖に優秀な人物がおり、また母方の血筋が、かすかながら唐の王室と二重につながっている、ということからくる特別な意識もあった。

このような、自分の能力に対する強い自負と、家系上の使命感とから、何とかして国家のために、人民のために尽くさなければ、という思いが、杜甫には常にあった。そうして、その思いは、やがて、命がけの脱出行へと彼をかりたてることになる。

（構成）

国破山河在
城春草木深　不変の自然と、混乱のつづく人間の世界との対比。

感時花濺涙
恨別鳥驚心　乱れた世にあっての杜甫の悲しみと嘆き。

烽火連三月
家書抵万金　いつまでもやむことのない戦乱—第三句を具体的に。家族の安否を気づかう—第四句を具体的に。

白髪搔更短
渾欲不勝簪　世の乱れに対して何もできずにいる、いらだたしさ、情けなさ。

㈢「九日藍田崔氏荘」　杜甫

老去悲秋強自寛
興来今日尽君歓
羞将短髪還吹帽
笑倩傍人為正冠
藍水遠従千澗落
玉山高並両峰寒
明年此会知誰健
醉把茱萸子細看

老い去きて悲しき秋　強いて自ら寛うす
興来りて今日は君の歓を尽くす
羞ずらくは短髪将て還お帽を吹かるるを
笑いて傍人を倩みて為に冠を正さしむ
藍水は遠く千澗より落ち
玉山は高く両峰に並びて寒し
明年　此の会　誰か健かなるを知らん
醉いて茱萸を把りて子細に看る

作られた時期について、安禄山の乱以前、乱の最中、乱後に杜甫が華州司功参軍に左遷されていた時と、いろいろに言われているが、今、乱後の作とする説に従う。

○老去悲秋強自寛、興来今日尽君歓。

「自寛」とは、「列子」天瑞篇にある、隠者の栄啓期の自得の生活を賛えた孔子の言葉、「善いかな、能く自ら寛うするものなり」による。「尽君歓」は「礼記」曲礼上の「君子は人の歓を尽くさず、人の忠を竭くさず、以て交りを全うするなり。」（人の好意は、ひかえめに受けるものであるの意）を意識してのもの。したがって此の

二句は、「老い去きて、しかもこの悲しい秋、気分はめいるばかりであるが、それをつとめてくつろげているこの頃、今日だけは興のおもむくままに、あなたの歓待を十分におうけしよう」という意味になろう。「年老いた私は秋の季節を悲しく思いながらも、つとめて胸の思いをくつろげようとし、興わくままに……」のような意味ではあるまい。

○荒 将 短 髪 还 吹 帽、笑 倩 傍 人 為 正 冠。

東晋・孟嘉の故事をふまえた句。故事は、陶淵明の「晋の故の征西大将軍の長史孟府君の伝」に見える。「短く薄くなってしまった髪の毛であるうえに、なおも帽を吹きとばされるのが羞ずかしい」と、てれくさそうに笑いながら、そばの人に、傾いたかぶりものをなおしてもらう杜甫は、今日はせっかくの崔氏のお招きゆえに、少しでも坐中にとけこもうと努めていたのであろう。いささかおどけた気分が感じられる句である。

前半の四句には、そのような杜甫の気分がただよっているが、後半の五・六句では、前半に見られるその気持ちとはうらはらに、杜甫の心は、一坐の人人のざわめきの中からはずれてゆき、その目は、いつとはなしに遠くの方へ、冷たくすきとおった藍水と玉山の景へと向かって、また、いつものような沈鬱な杜甫にかえり、孤独の世界に沈んでゆく。

○藍 水 遠 従 千 澗 落、玉 山 高 並 両 峰 寒。

両句とも、冷たく澄んだ寂しい景色であり、それはそのまま杜甫の心の風景といえよう。山の峰を「寒」と表現した例として、四十八歳の秋、秦州にいた頃の作「初月」（五言律詩）の中に、

河 漢 不 改 色　　河漢は色を改めず
関 山 空 自 寒　　関山は空しく自ら寒し

というものがある。これは、月が雲にかくれた後、河漢がぎらぎらと輝き、国境の山々が青黒くそびえる空を、離ればなれになっている親しい人人を思い、わが身の不遇を嘆きつつ見上げている場面であるが、その「関山」は「空しく自ら寒し」と杜甫の目にうつり、心に感じられる。「空しく自ら」とは、関山がそれ自身の世界に存在していて、それを見ている杜甫の心とは全く関わりのないことを意味する。その状態は、杜甫から見れば「空しく自ら寒し」と感じられたわけである。杜甫の心が、それによって慰められるということはない、ただ杜甫は孤独の思いに沈んでゆくのみである。

結びの七・八句へのつながりは、「初月」の場合は、

庭 前 有 白 露　　庭前に白露有り
暗 満 菊 花 団　　暗に菊花に満ちて団なり

と、ふと気がつくと、庭前の菊の花には、白露がいっぱいにおりていた。と結んで、暗い夜空に輝く河漢と、つめたくそびえる関山をながめていた時間の長さを暗に示しているが、「九日藍田崔氏荘」では、「藍水」と「玉山」の風景は、己の不遇と、人の命のはかなさに対する嘆きへと連なってゆく。

○明 年 此 会 知 誰 健、醉 把 茱 萸 子 細 看。

「知誰健」とは、「誰が健やかでおれるかを知らず」という意味。「知」は下に疑問詞がくると「不知」の意になる。孟浩然「春暁」の「花落知多少」も同じ。「花の落つること多少を知らず」。

「醉把茱萸子細看」は、この詩の中心をなす句であり、杜甫は、

人間の生命の無常を思いつつ、茱萸の真紅の実に、しげしげと見入るのであるが、その時の杜甫の気持ちをどのように説明すればよいのか。斯波六郎博士は、「中国文学における孤独感」の中で、そのことについて次のように説かれる。

戦乱の時代故、明年のこの会があてにできぬこともさることながら、それにもまして、杜甫の胸中には、自分を中心とした人間の生命の無常に対する深い悩みがひそかに去来したのであろう。しかし、そういう感慨にふけっていた杜甫は、そのあいだ、酒のやりとりをことわっていたわけでは、恐らくあるまい。他の人人とともに酒を飲みながら、独りで考えていたのであろう。つまり衆とともにありながら、その心は孤独だったのである。そして独りそういう感慨にふけっている時、ふと眼にとまったのが茱萸の実の色である。そこでその茱萸をとりあげて、と見こう見、しげしげと眺めておるうちに、いままで胸中にわだかまっていた悩みから、暫く解放されたのである。おしなべて人間は、あることに思い悩んでいると、眼はうつろになりがちであるが、そのうつろな眼はまた、はたと何かを捉えがちである。そしてつい今まで気づかなかったもの、無関心でいたものにふと眼がそそがれた時、そこに今更のように、新鮮な生命のいぶきを感じ、神秘さを感じて、心はそのものと融合してしまう。

人間の心理、心の動きというものを深く考察し、この時、茱萸と杜甫の心とが融合した状態にあったという説明である。

また吉川幸次郎博士は、「杜甫詩注」第三冊において、次のように説かれる。

今や詩人は「醉」い、「茱萸」を手に「把」って「子細」にしげしげと「看」いっている。かく自然を不思議なものとして見る感情が、杜甫には常にあった。「明年此の会　知んぬ誰か健なる。」そうした人間に超然として、紅玉のような赤さを年年にたたえるこの小さな実は、何を象徴し、何を意味するのか。それを思いつめる。……小さな不思議な神秘な存在に、視線と心理が吸収されることによって、詩は終る。

杜甫が常に抱いている「自然を不思議なものとして見る感情」によって、悩み多き人間に超然としているこの不思議な神秘な存在である茱萸に、視線と心理を吸収されている状態と解される。

真紅の茱萸の実に、じっと見入っている、これと同じような情景は杜甫の他の詩にも詠われている。

杜甫が蜀の成都にいた、五十歳ころの作、「野人送朱桜」詩（七言律詩）がその一つ。

西蜀桜桃也自紅　西蜀の桜桃も也た自ら紅なり
野人相贈満筠籠　野人　相贈りて筠籠に満つ
数回細写愁仍破　数回　細やかに写して仍お破れんかと愁う
万顆匀円訝許同　万顆　匀円にして許も同じきかと訝る

近所の農夫が竹かごにいっぱいにサクランボを持って来てくれた。かごからかごに何度も注意ぶかくあけうつすのであるが、まんまるな紅い粒が、どれもこれも、よくもこんなに丸くそろったものだと不思議に思う。

もう一例は、長安を脱出して鳳翔にたどり着いた後、休暇をもらって、家族のいる羌村に帰った時の長篇「北征」の詩の中に見える

もので、帰途、邠州郊外の山中を過ぎて行く時のようすを詠んだ部分である。

山果多瑣細　　山果　瑣細なる多く
羅生雑橡栗　　羅生して橡栗に雑わる
或紅如丹砂　　或いは紅きこと丹砂の如く
或黑如点漆　　或いは黒きこと点漆の如し
雨露之所濡　　雨露の濡すところ
甘苦斉結実　　甘苦　斉しく実を結ぶ
緬思桃源内　　緬かに桃源の内を思い
益歎身世拙　　益々　身世の拙きを歎く

ドングリに入りまじって生えている木々の実が、あるものは丹砂のような真紅であり、あるものは漆をポツリと落としたような黒であり、杜甫はそれら紅い実、黒い実を見ながら、雨露の恵みによって、甘いの苦いのが一斉に実を結んでいるのに心をうたれている。

以上、杜甫は、真紅の茱萸、桜桃。紅い、黒い木の実を通して、自然の道理・法則の存在を実感し、その欠けるところの無い完全さに感嘆しているのであろう。そうして、やがて感嘆からさめると、人間の世界の不合理と混乱を、自然の営みに比べては嘆くことになる。

〔構　成〕

老去悲秋強自寛　興来今日尽君歓　羞将短髪還吹帽　笑倩傍人為正冠　―とかく沈みがちなこの頃、今日は崔氏の好意を十分に受けたいと思う。―場面設定
―冗談の一つも言って坐中の人になろうとする。
―宴坐での様子

藍水遠従千澗落　玉山高並両峰寒　明年此会知誰健　醉把茱萸子細看　―杜甫の心は宴坐から離れて、その目は遠く藍水と玉山にそそがれる。―孤独の思い
―人の世の無常に思い沈みながらも、ふと手にした茱萸の実に、悩みを忘れる。―自然と融合

四　「旅夜書懐」　　杜　甫

細草微風岸　　細草　微風の岸
危檣独夜舟　　危檣　独夜の舟
星垂平野闊　　星垂れて平野闊く
月湧大江流　　月湧きて大江流る
名豈文章著　　名は豈に文章もて著さんや
官応老病休　　官は応に老病もて休むべし
飄飄何所似　　飄々　何の似る所ぞ
天地一沙鷗　　天地の一沙鷗

五十四歳のとき、厳武の死によって物心両面のささえを失った杜甫は、家族をつれて成都を去り、一そうの小舟に乗って長江を下ってゆく。この詩は、雲安のてまえ、忠州あたりに舟どまりした時の作である。

○危檣独夜舟

「独夜」とは、独り目ざめている夜、の意であるが、杜甫以前の用例としては、魏の王粲「七哀詩」に、

独夜不能寐　　独夜　寐ぬる能わず
摂衣起撫琴　　衣を摂り　起ちて琴を撫す

とあり、杜甫はそれを意識しているであろう。杜甫の詩では他に、

長江を更に下り、夔州にとどまっていた時、山の中腹にある家から大江を見おろしての作、「夜」（七言律詩）にも用いられている。

露下天高秋気清　　露下り天高く　秋気は清し
空山独夜旅魂驚　　空山　独夜　旅魂　驚く
疎燈自照孤帆宿　　疎燈　自ら照らして　孤帆　宿し
新月猶懸双杵鳴　　新月　猶お懸かりて　双杵　鳴る

すでに五十代も半ば、思いのかなえられなかったそれまでの歳月、のぞみの持てそうにない今後の歳月を思って、眠れぬ夜が多かったのであろう。

○星垂平野闊、月湧大江流。

「月湧」については、「湧」くのは月ではなく、月光に照らされた波とする説がある。その根拠としては、杜甫の詩における用例が、

春気晩更生　　春気　晩に更に生じ
江流静猶湧。　　江流　静かにして猶お湧く
（晩登瀼上堂）

江間波浪兼天湧。　　江間の波浪は天を兼ねて湧き
塞上風雲接地陰　　塞上の風雲は地に接して陰る
（秋興八首、その一）

秋晩岳増翠　　秋晩　岳は翠を増し
風高湖湧波　　風高く　湖に波は湧く
（湖中送敬十使君適広陵）

のように、波の形容に用いられることが多いことによるものと思われる。しかし此の詩では、対句の構成からみても、「星垂れ〜、月湧き〜」のごとく、湧くのは月ではなかろうか。

この頷聯の二句には、その夜、杜甫の眼前に広がる大自然の情景が詠われており、その前の二句が、

細草微風岸　　かぼそい草が微風にそよいでいる岸辺
危檣独夜舟　　高い帆柱の舟に私は独り眠れずにいる

と、近景を細かに詠じているのとは対照的である。杜甫の詩では、前半に自然、後半に人事すなわち自己の心情を詠う場合が多く、この「旅夜書懐」もそうであるが、この時期の律詩を見るに、前半の自然を詠ずる部分は、更に前後二つに分かれ、前二句には近景が、後の二句には遠景――大きな自然が詠まれているようである。例えば、五十六歳、夔州での作「登高」（七言律詩）では、その前半は、

風急天高猿嘯哀　　風急に天高く　猿の嘯くこと哀し
渚清沙白鳥飛廻　　渚清く沙白し　鳥は飛び廻る
無辺落木蕭蕭下　　無辺の落木　蕭々として下り
不尽長江滾滾来　　不尽の長江　滾々として来る

のごとく、第一・二句には、台上から上を見、下を見た時の近景が、第三・四句には、遥か遠くの方に注意を向けたとき、その目・耳に入った自然の大きな動きが詠われている。

また五十七歳、洞庭湖のほとりの岳陽楼に登っての作「登岳陽楼」（五言律詩）では、その前半は、

昔聞洞庭水　　昔聞く　洞庭の水
今上岳陽楼　　今上る　岳陽楼
呉楚東南坼　　呉楚　東南に坼け
乾坤日夜浮　　乾坤　日夜　浮かぶ

のように、第一・二句には、かねて話に聞いていた洞庭湖、今その

上に立っている岳陽楼が、第三・四句には、楼上からの大景が詠われている。

杜甫晩年の作に、このように大きな自然の動きが詠われる理由は何であろうか。杜甫は人間の世界の不合理、それによる己の不遇を嘆く際には、いつも、秩序と調和に満ちた自然の動き・運行を意識していたように思われる。そうしてその思いは、年老いてゆき、生涯の不遇が決定的となった晩年においては、ますます強くなっていったようである。すなわち、秩序と調和に満ちた不変の自然の動きが、以前にもまして、強く心に響いてきたものであろう。後半の四句で、己の不遇を切々と訴えていることからも、そのようなことが考えられる。すなわち「旅夜書懐」でもそうであるし、「登高」も、

万里悲秋常作客　　万里　悲秋　常に客と作り
百年多病独登台　　百年　多病　独り台に登る
艱難苦恨繁霜鬢　　艱難　苦だ恨む　繁霜の鬢
潦倒新停濁酒杯　　潦倒　新たに停む　濁酒の杯

と、旅に病み老いてゆく己の不運を嘆いており、「登岳陽楼」でも、

親朋無一字　　親朋　一字無く
老病有孤舟　　老病　孤舟有り
戎馬関山北　　戎馬　関山の北
憑軒涕泗流　　軒に憑れば涕泗流る

のように、戦乱の世に遠く故郷を離れて旅にある老病の身を嘆いている。杜甫の詩は年齢とともに変化してゆくといわれるが、以上のべたことも、杜甫の晩年における詩の変化の一相と言えるかもしれない。

○名豈文章著、官応老病休。

この句については、従来、二通りの解釈が為されている。その一つは、「自分のような者が、どうして文章で名を著わすことができようか。しかし、それによって名を著わそうとしている官の方も、老いと病気のためにやめてしまうことになりそうだ。」もう一つは「自分の名を、どうして文章などで著わそうぞ。（官によってこそ名を著わしたかったのに）官は老いと病気のためにやめてしまうことになりそうだ」というものである。

前者の解釈をするものには、例えば「読杜心解」（清・浦起龍）の「五・六は、分を揣りて謙和なり」、また「杜詩詳註」（清・仇兆鰲）の「五は自謙に屈し、六は乃ち自解」などがあり、後者の解釈をするものには「杜詩偶評」（清・沈德潛）の「胸に経済を懐く。故に『名は豈に文章を以て著わさん』、官は事を論ずるを以て罷めんに、『老病もて応に休むべし』と。何ぞ其の温厚なる」がある。

頼りにしていた厳武に死なれ、五年半を過ごした成都を失意のうちに去って長江をくだる杜甫の心を思えば、「文章ではとても名はあげられそうもないし、さりとて官によっても名を著すことはできず……」と、失意の極にあるものと解すべきかとも思うが、一・二年の後、夔州での作「偶題」では、

文章千古事　　文章は千古の事
得失寸心知　　得失　寸心知る

「文章は永遠不滅の大事業であるが、私は、文章の可否得失について、この心で見分けることができる」つまり、自分は永遠不滅の詩を作ることができる、という誇らかな自信を表明しており、自分の

詩について、時に「老去詩篇渾漫与」（老い去きて詩篇は渾て漫与なり）―江上値水如海勢聊短述―（蜀での作）と、年をとってからは詩はすべて漫然と作っており、「語人を驚かさずんば死すとも休めず」というかつてのそんな気持ちもなくなった、と言うこともあるが、心の中では、自分の文章が海内を驚かすことのできないものであるとは、決して思っていなかったであろう。やはりここは後者のごとく、文章よりも官によってこそ名を著わしたかった、とする解釈にしたがうべきかと思う。

○飄飄何所似、天地一沙鷗。

運命のままに漂う自分は、いったい何に似ているかといえば、それは此の広い天地の間に、風の吹くままに漂っている一羽の沙はまの鷗、と詠う杜甫は、蜀を去った五十四歳の時の作、「去蜀」詩にも、

万事已黄髪　残生随白鷗。
万事已に黄髪
残生白鷗に随わん

のごとく、風の吹くままに飛びめぐる白鷗のように余生を送ろうと詠う。いずれも、此の世における望みがかなえられず、あとはなりゆきに任せて生きてゆこうという思いを「鷗」に託したものであるが、杜甫の若い頃の作に詠われる「鷗」は、そんな鷗ではなかった。

杜甫がまだ四十歳にならないころの作、「奉贈韋左丞丈二十二韻」、これは尚書左丞の韋済に仕官のための推薦を依頼した詩であるが、その中に次のような句がある。

白鷗没浩蕩　白鷗浩蕩に没しなば
万里誰能馴　万里誰か能く馴らさん

仕途の見つからぬ私は、東の海に去ろうと思うが、もし白鷗のように浩蕩たる波間にきえていったなら、万里の彼方までも、何の束縛を受けることなく自由に飛翔してゆくことであろうと、誰の束縛も受けないで自由に波間を飛んでゆく「白鷗」に、自分をたとえている。その若いころには、このように自由な生き方の象徴として詠われていた「鷗」は、不遇のうちに老年となったこの時には、さすらいの象徴と変化しているのである。

（構成）

細草微風岸　舟どまりしている岸辺の景。
危檣独夜舟　―心細さ・寂しさ
星垂平野闊　眼前に広がる大自然の動き。
月湧大江流　―悠久の自然への思い
（自然）

名豈文章著　不遇な己の生涯を思っての嘆き。
官応老病休
飄飄何所似　漂泊の身を鷗にたとえる。
天地一沙鷗　―孤独感・あきらめ
（人事）

（本学助教授）